



スクールカウンセラーだより 15号

令和8年3月
岩美町立岩美中学校

スクールカウンセラーの森田です。

3月11日の朝日新聞「折々のことば」に、『その人が生きてきた人生のある時期を、大切な時間として覚えていてくれる誰かの存在が、人を支えるのだと思います』という東日本大震災後の東北被災地で生まれた子どもを調査した児童精神科医師のことばが掲載されていました。私は震災支援のために石巻市に行った経験から、上記のことばに深い共感を覚えました。

「人生のある時期を覚えていてくれる誰かの存在」、このことは家族がもっとも基礎になるのではないのでしょうか。家族メンバーのつながりの濃薄が子どもの人生に影響を与えるといわれます。

1986（昭和61）年に小此木啓吾（慶応大学医学部精神科医師）が『家庭のない家族の時代』という本を書かれています。小此木医師は30年後に日本がどうなっているかを精神分析という理論をもとに研究された方です。現在は1986（昭和61）年からすでに40年が経過していますが、小此木医師の予言はかなり当たったものになっているようです。



小此木医師が考えた新しい家族形態として



「ホテル家族」というものがあります。それぞれが自分の部屋を持ち、その部屋に便利な道具（昔はテレビ、現在はスマホやタブレット）があって、自分本位に暮らすことができます。何でも望みがかなって好きなことができます。家庭には何の義務もないし何の責任もありません。ごろ寝したり気ままに過ごせたりします。家族全員がバラバラでろくに話もしないし、生活時間がずれているので一緒に食事もしません。ちょうどそれは高級ホテルに泊まっているようなものです。子どもがネットやゲームに依存してしまうのも仕方のないことなのかもしれません。かつての家族のつながりや人間のつながりは、

これからどうなっていくのでしょうか。新年度がはじまるにあたって考えてみてはいかがでしょうか？